

が我々を迎えてくれた。

「長い間、ご苦労さまでした。」の一言が胸に迫り、涙を押さえることができなかった。

船の中に腰を下ろして初めて我れに返った。これでやっと日本に帰れるのだと実感が出てきた。

白いご飯、みそ汁、お新香を久しく口にすることがなかったで日本の味を食することができ、とてもうれしかった。

後は舞鶴港に上陸するのみとなった。

抑留の日々

島根県 大谷 昭

二十年十二月二十九日、北朝鮮東海岸北緯四十四度にある興南という工場地帯の港で、ソ連国旗を揚げた輸送船に乗船した。

気温は約零下十度、小雪がちらつく日であった。日本人の通訳の話では東京ダモイだとのことだが、平壤

でソ連軍の管轄になってからだまされ続けてきた。その状況は到底日本へ帰還できるとは考えられなかった。

一昼夜航海を続けたころ、船腹の鉄板が氷結し出して真っ白になり、波を切る音がバリバリと氷を割っている音に変わり始めた。

寒さと空腹と疲労でもうろうとなった。

数時間後船がとまっていることに気づいた。出航して四十時間くらいの間、上甲板の出口には自動小銃を持ったソ連兵がいて、甲板へ上ることができなかった。やがて、上れるようになり、出て見ると甲板はごろごろした厚い氷が張り鉄骨もロープも氷結していた。数時間止まっていた船が方向をかえて再び航行を始めた。

数か月してわかったことだが、ウラジオストック港の入り口は氷が厚く入港できず、やむなくナホトカヘ向かったとのことである。

その翌日、下船をする段取りとなった。

気温は低く防寒衣に突き刺さるような寒さである。

手足の感覚がなくて、ただ茫然とタラップを下りた。

船は海岸から二百メートルくらい離れた沖に停泊していた。氷が張りつめて、これ以上接岸できないのだ。陸地まで歩いたが、歩みの進まない敗戦の兵に比べ、氷の上で元気に遊ぶソ連の童たちとは全く対照的だったと、強く印象に残っている。

この日の夜、米国製の前後輪駆動のトラックで約十時間の走行が続いた。凍てついた森林地帯が続き、河川があっても凍結しているから一直線に走っている様子だった。

幌のある車だが、零下十七度〜二十度で暖房なしでは小窓から外部を見る気力もなかった。

到着したところはウラジオストクの山手の一兵舎であった。この兵舎で約一年暮らしたが、百五十人くらいの兵隊は周辺の作業場へ三十人、四十人が分散して土木建築、港の荷役などに従事した。

ソ連での抑留生活は、食糧不足、厳寒、ノルマによる体力の減退はどここの地区にいた者も大同小異であるが、私の周辺にもこんな兵士がいた。

和歌山県出身の召集兵で当時三十三歳くらい、終戦前の部隊では意地の悪い班長だったが、ピタミンC欠乏症で、全身がはれて壊血病となり、夕刻から夜にかけ目が見えなくなり、ほとんど一人で動けなくなって病院へ送られた。

新潟出身で五年兵の上等兵は筋肉たくましい古参兵だったが、班長と全く同様に病院へ送られた。

二年目になってラーゲルの移動があった。

市街地から二キロばかり離れた丘陵地に米国製の幕舎が並んだラーゲルだった。シラカバの枝でつくったバラック建てに、この幕舎が覆われたものである。

一棟の人員四十人、幕舎は五十くらいあったはずだ。

二十二年の夏の夜のことである。栃木県出身の召集兵の軍曹が私たちの幕舎から出て、ラーゲルの出入り口から抜け出して、間もなく射殺された。豪快な下士官であったが、強いホームシックにかかり逃亡不可能な状況判断ができなくなったのであろう。

それから間もなく特幹の兵長十八歳が建築現場の足場から落ちて即死した。彼は四階の外壁の足場、私は

同じ建物の五階にいたからその瞬間を今でもよく記憶している。

このラーゲルで暮らした一年半の間に、ラーゲル内の墓地には数十人の戦友が永遠の眠りについた。

ウラジオストック港はソ連の極東における唯一の不凍港であると教えてくれていたが、十二月になると凍結が始まる。

港の入り口は日本海の西南西にあり、奥行は六キロ、幅は平均三キロくらいであろうか。周囲の地質は石が多いようで、水深はみるからに深そうである。

北北西側は軍港で上陸用船舶・潜水艦・駆逐艦・巡洋艦と並び、その対岸は大型漁船・貨物船・鉄道の引込線と大型倉庫が立ち並んでいた。この港の軍艦から並ぶバーツに建築中の化学工場があり、配管工事に一年間作業に通った。

十二月から三月上旬までは軍港であるのに、凍結するため、砕氷船で朝夕二回大きな砕氷の音をたてながら港の奥部から外洋に移動、また引き返してくるが、その間に港は再び凍ってトラックが近道をするため氷

の上を走る。

町は生活用水が流れるとすべて凍結して、家の周辺も道路も氷、氷、氷で歩行しにくい。

ラーゲルから作業現場までの往復は零下十数度であるのに歩きにくいから汗が流れる。一枚しかない肌着は汗で茶色になり、洗濯もできないからシラミだらけとなり、弱っている者は発疹チフスとなって病院へ送られるが、骨になって帰る者も少なくなかったようだ。化学工場の工事が一段落して、今度はラーゲルに近い丘陵地の建築工事に取りかかった。

基礎の穴掘りが大変であった。

ソ連の現場監督がつくった「縄張り」の基礎は十メートル×二十メートルくらいだが、基礎の深さは二メートルにせよとの指示である。

土も凍っていて、ツルハシを振り下ろしても岩のように固く、はね返ってくる。

トラックでたき木が持ち込まれた。基礎づくりの場所でたき火をして土の凍結を解き素早く掘る。二十秒も掘るともう凍りついて掘れない。今掘った穴の隣で

またたき火をする。掘っている時間よりたき火をして
いる時間が長いくらいだから、トラックで運んだ木は
一日ももたない。

一か月くらいすると、監督がハラショーの合い図を
出す。次はコンクリート打ちだが、これも大変である。
トラックで運ばれて来た氷まじりの水をドラム缶の釜
で湯をわかす。砂を焼くため分厚い鉄板で釜をつくり、
湯気の出るほど砂を焼いた。漬物石のような大きなグ
リ石、湯気の出る砂、そして沸騰した湯とセメントで
コンクリートをつくり一輪車で基礎の中へ流し込む。
下手をして火傷する者もあった。

ソ連の基礎工事はどうして寒期に行うのだが、それ
は穴掘りをしたところが凍っていて土が崩れず、土ど
め板など要らないからだと気づく。四十人くらいでこ
の基礎工事が三か所でき上がった。

気温がプラスになるころには、一棟のブロック建て
の兵舎の形ができた。

四月下旬になると、丘陵地には枯れ木のごとく眠っ
ていた木々は一斉に芽を吹き、五月上旬には一面の新

緑となり、抑留の我らも心が和んでくる。

アカザという木の葉をセメント袋に詰め込んで、ラ
ーゲルへ持ち帰り飯盒でゆがき岩塩でもんで皆が食べ
た。野菜が全くないシベリアではビタミンC摂取の貴
重な方法であったし、また空腹をしのご季節的な良策
でもあった。

血気盛んなはずの現役兵の私だが、体力消耗が激し
く、虚弱者帰還したのは二十三年の夏であった。

ウラジオストク抑留四年

新潟県 風間 健次

千葉縣市川の通信隊で教育を受け、東京空襲を体験
の後、北支派遣軍の一員として渡支したものの転居先
の部隊はすでに南方へ転進、転々して北朝鮮の第七軍
司令部師団通信隊に到着したところで終戦を迎えた。

武装解除・興南港発八月三十日、ウラジオストク港
着九月一日。港の西北部山麓に関東軍の大天幕が二千